流山稲門会

【交譲葉】俳句の会 報告

令和六年一月句会（第一四〇回）

兼題　［元旦］
開催日　令和六年一月二十日
開催場所　生涯学習センター
出席者　七名
投句者・選句者　七名

（五点句）

●元旦に電池入替え時新た　互酬

選評…元旦を受けての内容は類似形になり易く難しかった。その中でこの句は「電池入替え」という切口がユニークであり且つ自身の新年に向けての前向きの姿勢もうかがわれ共感を抱かせるのに十分であった。（小牧記）

（四点句）

●山門に和らぎ添えて冬桜　小牧

選評…作者はきっと良い年を迎えるべく初詣に向かって歩いているのであろう。参道を歩き山門をくぐろうとした時に、冬の厳しさの中に咲く可憐な桜を見つけたのであろう。

その時の風情と心模様を一瞬にして、文字で切り取り表した。句の流れ、感覚が非常によく、和らぎが一層増す句である。（互酬記）

●紅色の花絵手紙や寒の入　玄鳥

選評…寒の入りとなり、嗚呼これから寒さが厳しい時期になるのだな、と若干身構えていた時に知人から絵手紙を貰った。その絵手紙は鮮明な赤い色で花を描いたものであった。それを見て、作者はちょっと暖かい気持ちになり、心が和んだ様を詠んだのであろう。

紅色の花による暖かさを手紙という媒体で表現した処を評価する。（徹心記）

●会おうねとまた繰り返す初電話　小牧

選評…年の初めの初電話をするからにはよほど親しい仲なのだろう、久闊を叙し、ひとしきり話をして、最後にまた会おうねと電話を切る。会いたい気持ちは本物だが、多分今年も会えないだろうなという気持ちが出ている。（夢心記）

（三点句）

葉にも果の匂い立ちたる焚火かな　玄鳥
冬夕焼真白き富士が黒と化す　互酬
喰積の福みな腹に納めけり　寿歩

（二点句）

増減も過不足もなく我が元旦　寿歩
屠蘇の儀は帰省子からの酌み始め　徹心
新春や鳩の羽ばたき迎賓館　寿歩

（一点句）

去年今年戦は続く埒も無し　徹心
レトルトの七草粥で気分出し　徹心
去年今年暖簾を潜るごときもの　玄鳥

（投句）

孫揃い元旦祝いて筆競う　艸寛
元旦の空朗らかに晴れ渡り　夢心
元旦の白湯五臓六腑に沁む　玄鳥
傘寿なる元旦思ふこと多し　小牧
偶さかが偶然でない能登地震　互酬
二日夕 JAL 五一六炎上す　夢心
初詣何事なきを美まし国　小牧
其処かしこ門松無き家増えにけり　徹心
風静か半分に減る年賀状　艸寛
元旦や大いなる地震能登襲う　夢心
元旦を迎える喜びあと何回　艸寛
雪とかし営み繋ぐ能登地震　寿歩
年賀状受け出し忘れに付箋する　互酬
三日夜刃物振るいし女あり　夢心
七日粥深き野菜の味絶品　艸寛

『句会後記』

全員参加の初句会は青木さんの司会のもと、いつもどおり和やかで闊達に行われました。知らない景色や過去を経験したり違った角度の物の見方や感性に触れたりと、とても有意義な時間でした。菅原幹事のもと、おおたかの森の徳樹庵に場所を移してさらに交流を深め、心もお腹も満ち足りたところで終会になりました。皆様、本年もどうぞよろしくお願いいたします。　寿歩記